金次郎物語

【第2部】大人になった金次郎

大人になった金次郎さんは、多くのあれはてた町や村を立て直したんだよ。金次郎さんの教えに、さいしょは耳をかさなかった人たちも、その人がらや熱心（ねっしん）さに心を打たれて、だんだん協力（きょうりょく）するようになっていくんだよ。

金次郎さんは、どんな教えをみんなに広めたのかな。きっとさいしょはうまくいかなかったんじゃないかなあ。そんな苦労（くろう）した話ものっているのかな。

町や村の立て直しがせいこうしたときは、みんなでよろこんだんだろうね。金次郎さんって、神様みたいな人かもしれないね。

（6）服部家の立て直し

服部十郎兵衛は、小田原藩に仕え、家老という重要な役目についていました。当時さむらいは、とのの様から※俸禄をもらってくらしていました。十郎兵衛は家老という役職でしたので、多くの俸禄をもらっていました。しかしこのころは、どの藩でもざいせいが苦しくなったため、十郎兵衛の俸禄は、今までの約三分の一になってしまいました。しかし、服部家では、俸禄がへっても、生活をかえることなく、りっぱなきぬの着物を着て、ぜいたくなものを食べていました。そのため、ついに※250両もの借金ができてしまいました。

たくさんの借金をかかえた十郎兵衛は、大へんこまりました。そんな時二宮金次郎のことを思い出しました。金次郎はびんぼうのどんぞこから、ちえと努力で家を立て直し、今では、村の中でもゆたかなくらしをしているというのです。金次郎はこのとき32才でした。

十郎兵衛は、さっそく金次郎に、

「服部家のくらしむきが、きちんとしていくようにしてほしい。」

と、何回もたのみました。金次郎は、十郎兵衛のたのみをことわることができず、とうとう引き受けることにしました。十郎兵衛は、とてもよろこび、立て直しのすべてを金次郎にまかせました。

服部家にのりこんだ金次郎は、おそれながらと十郎兵衛に言いました。

※俸禄：給料のこと。

※250両：今のお金にすると、約2,500万円。

「たくさんの借金をして、それを返そうともせず、ただこまった、こまったというだけで、何もしないで毎日をすごしているとは、とんでもないことです。これからは、今までのようなくらしはやめることです。食べる物はごはんとしるものだけ、着物はもめんだけとして、きぬは着てはいけません。むだな遊びはいっさいやめ、お酒もひかえてください。これから何年間かこうした生活をしていけば、やがて借金を返すことができるはずです。生活を立て直すには、これくらいのがまんのくらしがひつようです。」

十郎兵衛は、金次郎のこの話を聞いて、まったくそのとおりだと思いました。その日から、十郎兵衛は金次郎の立てた計画にしたがって、しめされたとおりのくらし方をしていく決心をしました。しかし実行することは、かんたんではありませんでした。

お金は、みんなが生活していくのにぜったい欠かせないことだけに使いました。食べ物やまきは1日に使う量を決め、着物はもめん以外は使わず、やぶけたら当てぬのをして使うなど、つつましい生活が始まりました。十郎兵衛は、毎日、新しい生活をなんとか実行していきました。しかし、しばらくすると、前に着ていたりっぱなきぬの着物をどうしても着たくなってしまいました。

（鳥と花のもようが入ったきぬの着物は、あたたかくてよかった。それに道を歩いていると、みんながうらやましそうに見たものだが……。）すると、とつぜん、金次郎のきびしい顔がうかびました。

「朝に夕に、心の中でよいことばかり思っていても、自分がりっぱになれるとはかぎりません。よいことだと思ったことを実行しなければ、その人を本当によい人だとは言えません。悪いことをし

た時、（悪いことをしたなあ。）と思うだけではだめで、あらためなければどうにもなりません。書物を読んでも、その教えを実行しない人は、くわを買ってもたがやさないのと同じです。たがやさないのなら、どうしてくわを買うひつようがありましょう。世の中のことは、自分が努力し、実行しなければ、何事もできないのです。」

つつましい生活にがまんできなくなると、十郎兵衛は、金次郎の言葉をくり返しくり返しつぶやきました。そして、金次郎の書いた服部家立て直しのための『生活の約束』を読んで、ゆっくりうなずくのでした。

１年がすぎました。生活費を計算している十郎兵衛の顔が、だんだんかがやいてきました。借金の一部を返せるだけのお金ができているのです。十郎兵衛は、きぬの着物を着たくなったあの日を思い出し、にがわらいをしました。

「はでなくらしをやめてよかった。これからも、この生活をつづけよう。」

十郎兵衛はつぶやきました。今、金次郎の言葉の意味がやっとわかったのでした。

その後、服部家の借金は、年ごとにへり、5年たった時には、とうとう全部の借金を返すことができました。それどころか、貯金さえもできていたのです。

なっとく金次郎⑤

一言で言えば「せのびせず、自分で考え、自分にふさわしい生活をする」ことだよ。

人には、決まったしゅう入がある。「それぞれの人が、自分に合った生活を送ることが大切である。」と、金次郎さんは教えているんだよ。

チャレンジ金次郎③

みんなも、分度にちょうせん！
おこづかいの使い方は、どうかな。
計画的に使っているかな。

金次郎さん　分度達成

- ☆☆☆☆ 自分にあった目ひょうや決まりをつくって計画的にすごす。
- ☆☆☆ 節約をする。
- ☆☆ むだづかいをしない。
- ☆ ものを大切に使う。

（7）岸右衛門

服部家の立て直しをせいこうさせた金次郎は、小田原藩主の大久保忠真から※桜町の立て直しをたのまれました。あまりの大仕事に、さいしょはことわっていた金次郎でしたが、との様から、

「お前でなければ、この仕事はできない。ぜひやってくれ。」

と、何度もたのまれました。（との様から、これほどまでに言っていただき、引き受けないわけにはいかない。農民のくらしがよくなる仕事なら、自分の家のことをぎせいにしても、なくなったお父さん、お母さんも、よろこんでくれるだろう。）と考えるようになりました。桜町の立て直しを決心したのは、金次郎37才のときのことでした。

金次郎は、自分の家や田畑を売りはらい、家族とともに桜町にうつり住み、あれはてた町の立て直しにとりかかりました。

金次郎の指導は大へんきびしいものでしたから、それについていけない人もたくさんいました。物井村の岸右衛門もその一人で、金次郎の桜町の立て直しに反対し、悪口を言ったり、じゃまをしたりしていました。

しかし、7年がたつうちに、桜町全体の立て直しがうまく進むようになると、金次郎に協力する人がふえてきました。そうなってくると、岸右衛門はあわて出しました。岸右衛門は金次郎のところへ行って、協力を申し出ることにしました。

金次郎は、岸右衛門が今までしてきたことには何も言わないで、

「岸右衛門さん、ありがとう。ぜひ、おねがいしますよ。」

と言うだけでした。この言葉を聞いて、岸右衛門は、（あんなに金次郎さんに悪いことをしたのに、わたしをゆるしてくれるのか。）と思いました。金次郎の心の広さがわかり、今までの自分の行動

※桜町：今の栃木県真岡市。江戸時代は、小田原藩の土地だった。
物井村、横田村、東沼村を合わせて、桜町といっていた。

を深く反省しました。そして、村のために、はたらこうと決心しました。

その日から、岸右衛門は、村人の先頭に立ってはたらきました。けれども、村人たちは、だれ一人そんな岸右衛門についてきません。岸右衛門が、今まで桜町の立て直しに協力するどころか、じゃまばかりしていたことを知っていたからです。岸右衛門は、村人たちのたいどに、はらをたてて、金次郎にぐちをこぼしました。

「わたしは、昔は金次郎先生のなさることに反対して、悪口を言いふらしていましたが、今では一生けん命はたらいています。それなのに、村の人たちは、今のわたしの本当の気持ちをわかってくれません。」

金次郎はしばらく考えていましたが、やがて話し出しました。

「7年もの間、この仕事に反対していたあなたが、急に協力し出しても、みんなが信じてくれないのは当たり前です。あなたの気持ちを村の人たちにみとめてもらうには、みんなのためになる大きなことをしなければ無理ですね。」

「それでは、わたしはどうすればよいのでしょうか。」

「あなたの家のざいさんを全部、村のために使ってごらんなさい。あなたは、今まで自分のりえきになることしか考えませんでした。自分のよくを捨てて、村のために力をつくすことほど、すばらしいことはありません。今こそ、物井村のために、はたらくのです。そうすれば、村の人たちも、あなたをかならず信用します。」

それを聞いて、岸右衛門の顔色がかわりました。ざいさんを投げ出せば無一文になってしまいます。家族のくらしはどうなってしまうでしょう。考えれば考えるほどまよってしまうばかりでした。

しばらく時間をおいて、金次郎はふたたび言いました。

勤労

「あなたが決心できないのは、家族のことを考えているからでしょう。」

「はい、わたし一人だけなら何とでもなりますが、家族のくらしが心配なのです。」

「心配いりません。ざいさんを投げ出して村のためにつくそうという人を、どうしてわたしが見ごろしにするものですか。家族のことは、わたしにまかせなさい。」

この言葉を聞いて、岸右衛門は、やっと決心がつきました。

「お言葉にしたがいます。桜町の立て直しのお手伝いをさせてください。」

推譲

岸右衛門は反対する家族をせっとくし、家も田畑も売りはらって、そのお金を金次郎のところに持ってきました。

金次郎は、よろこんでそのお金を受け取り、桜町の立て直しのために使いました。

一方、岸右衛門には、あれ地の開こんをすすめました。岸右衛門とその家族は、一生けん命はたらきました。金次郎も、人をやとって岸右衛門一家の手伝いをさせました。こうして、多くの田が、新しく開かれました。

「岸右衛門さんのおかげで、こんなにりっぱな田んぼができました。今日から、この田んぼは、あなたのものですよ。」

こうして、岸右衛門は、前よりも広い田を自分のものとすることができました。しかし、岸右衛門にとって、もっとうれしいことがありました。それは、村の人たちに、心から信頼されるようになったことです。

なっとく金次郎⑥

推譲とは、どんな教えだろう。

一言で言えば「ゆずる」ことだよ。「人間は、ゆずり合うことで、はじめて人間らしい生活ができる。」と、金次郎さんは言ったんだよ。さらに、「推譲の心が、人間に平和と幸せをもたらす。人間と動物のちがいは、ゆずるという気持ちがあるかないかである。」と教えたんだ。

チャレンジ金次郎④

みんなも、推譲にちょうせん！こんなことから始めてみよう。

ブランコをゆずる

すれちがったときに道をゆずる

ボランティア活動で力をかす

電車やバスで席をゆずる

わたしがふだんやってることも推譲だったんだ。

（8）木の根ほり

45才になった金次郎が進めた物井村の開こんは、岸右衛門さんに協力してもらいましたが、大へんな苦労がありました。それは、この土地が70年以上もの間、あれたままになっていて、大きな木が森のようにしげっていたのを田畑にかえる仕事だったからです。

そのころの開こんの道具といえば、くわやすき、のこぎりが主だったので、作業には大ぜいの人手がいります。村の人だけではとてもできません。そこで金次郎は、よその村々から大ぜいの人をやとって仕事を始めました。

はたらきに来ている人たちは、体も大きく力自まんのわか者がほとんどです。その中に、※常陸国笠間村からはたらきに来ているおじいさんがいました。おじいさんは、（元気なわか者たちと同じようにはとてもはたらけそうもない。これから先、どうしたものか。）と、心配になりました。もともと開こんの仕事は、老人にはきつすぎます。どんなにがんばっても、わかい人の半分くらいしかできません。

いよいよ開こんが始まりました。わかい人たちは、自分のはたらきぶりを役人にみとめてもらおうと、先をあらそうようにできるだけ土がやわらかく大きな木の根が少ない場所をえらんで開こんしていきました。

しかし、おじいさんは、

「わたしが役に立つ仕事はこれだ。」

と、わか者がのこした大きな木

※常陸国：今の茨城県

の根をほり始めました。太い根っこは、四方に広がり、地中深くのびています。おじいさんがどんなにがんばっても、人目につくように進む仕事ではありません。開こんを見て回る役人の中には、

「何だ！このおいぼれは。ほかの者の半分も仕事ができないではないか。」

と、しかりつける者もいました。けれど、おじいさんは、決して楽な仕事にまわろうとはしませんでした。（わたしのような年よりがはたらかせてもらえるだけでもありがたい。その上、わか者と同じようにお金がいただける。それなら、自分が一番お役に立つ仕事をしなければ申しわけない。）と、朝から夕方まで休み時間にもこつこつと木の根ほりをつづけました。

そんなおじいさんに、金次郎は、

「休み時間ぐらいは、ゆっくり休みなさい。」

と、声をかけました。

「はい、ありがとうございます。でも、ごらんのような年よりで力がございません。みなさんといっしょに休んでいたら、みなさんの半分も仕事ができませんから。」

と言って、休もうとはしませんでした。

時間こそかかりましたが、おじいさんのはたらきで、大きな木の根も一つずつかたづいていきました。

何か月もかかって、やっと開こんが終わりました。役所では、よそからはたらきに来てくれた人々にお金をはらって、自分たちの村へ帰すことになりました。

その日、金次郎は、おじいさんをとくべつによびました。金次郎によばれたおじいさんは、（もしかしたら、自分はほかの人の半分

もはたらけなかったことをしかられ、お金をはらってもらえないかもしれない。）と思って、おそるおそる金次郎の前へ出ました。

　すると、金次郎はやさしい声で、

「おじいさん、長い間ご苦労だったね。かげ日なたなくはたらいてくれたごほうびだ。」

と、15両のお金をおじいさんにさし出しました。しかし、

「とんでもないことです。みなさんと同じお金をいただくのさえもったいないのに、こんな大金をいただけば、ばちが当たります。」

と言って、おじいさんは受け取ろうとはしませんでした。すると金次郎は、おじいさんにこう話しました。

「遠りょすることはない。わたしは何か月もの間、お前さんのはたらきぶりを見てきた。やった仕事の量は、わかい者の半分ほどかもしれない。しかし、お前さんは、人のいやがる仕事を見つけては、そこではたらきつづけた。決して楽な仕事をしようとはしなかった。人間、年がちがえばはたらく量もちがってくるのは当たり前だ。しかし、人間の心は、老人もわか者もちがいがあってはならないはずだ。人が見ていようがいまいが、自分のつとめを全力でやることは、人間としてまことにりっぱなことだ。」

金次郎の話に、おじいさんはなみだを流して聞き入りました。おじいさんには、えがおでやさしく話す金次郎のすがたが、かがやいて見えました。

なっとく金次郎⑦

金次郎さんは、人間と自然とのかかわりについても教えてくれているね。

「天道・人道」ってどんなことだろう。

金次郎さんは、多くの村の立て直しや土地の開こんをするときに、人々に「天道・人道説」を伝え、せっとくしました。「天道」は自然、「人道」は人間のことです。開こんは自然と戦って、人（人道）のものにすることですが、どこを開こんするかは、そこの自然（天道）をよく知らなければいけません。金次郎さんは、その土地のかこの災害や気候のへん化などをくわしく調べることから始め、

「ここは川がすぐ近くにあるから、田んぼに水を引きやすいよ。」

「あそこは地しんがおきたら津波がくるからだめだ。」

「むこうは南に向いていて日がよく当たるから、作物の育ちがいいよ。」

のように話し、みんなで力を合わせて開こんを進めていきました。

また、金次郎さんののこした言葉に『**自然にしたがい、自然にさからえ**』もあります。金次郎さんは、村人たちに水車をながめながら、次のような話をし、人間と自然の関係をわかりやすく伝えました。

水車は、下半分は水の中に入っていて、水の流れと同じ方向に回っている。でも、上半分は、水の上に出て、水の流れと反対に回っている。人の生き方もこうでなければいけないよ。田んぼや畑にざっ草が生えるのは自然だが、その自然にさからって草取りしたり、害虫をやっつけたりして作物を育てるように、半分は自然にしたがい、半分は自然にさからって努力することが大切なんだよ。

動物は、自然の中で自然のまま生きているけれど、人間は、時には自然と戦わなければならないときもあるんだね。地震・台風・雷など自然はすごい力をもっているけれど、それらから上手に人間を守ることを金次郎さんは教えてくれていたんだね。

チャレンジ 金次郎⑤

金次郎のカルタをつくろう

お話を読んで
金次郎さんのことが
いろいろわかったね。
大切な教えが
たくさんあったね。

わかったことを
カルタにしてみたいな。
さっそく作ってみよう!!

あ

あかりが
ほしくて
アブラナ育てる

き

金次郎
自分のことより
みんなのために

わ

わらじを作って
みんなにあげる
金次郎

どんなお話
だったかな…。

◎文字と絵カードを作ろう。

文字カード …お話に出てきた大事なことばや教えをもとに書こう。

絵カード …イラストをかこう

◎みんなで遊んでみよう!!